

芦屋市立美術博物館は、1991年に芦屋市制施行50周年記念事業として開館いたしました。美術部門と歴史部門を併せた複合施設として、芦屋ゆかりの作家の作品を中心に内外の名品をご覧いただけます。また、芦屋の自然や歴史を実際に目で確かめ体験する学習の場として、皆様に親しまれる身近な文化施設となることを目指しています。

イベント情報

ART MARKET あしやつくるば

年に2回、当館のお庭で手作りマーケットやワークショップの出店者が集まります。“つくる”ことから生まれる喜びや発見を共有する2日間です。



アートスタディプログラム2021
Mana-Bihaku-Room /
まなびはくルーム

美術家や専門家、学芸員と一緒に、美術の面白さ、楽しさ、難しさなどを発見していく講座やワークショップなどを開催します。

※詳細は当館HPでご案内します。



高橋耕平「個と風景の「造形」(ワークショップ、パフォーマンス、トーク)」2019

小出橋重アトリエ

芦屋ゆかりの洋画家・小出橋重のアトリエを復元し、愛用の画材やモチーフなどの遺品、資料を展示しています。美術博物館開館中はどなたも無料でご覧いただけます。



喫茶

Café de Repos カフェ・ドルボ

美術博物館の前庭に隣接する喫茶店。特別展に合わせ期間限定のデザートメニューもご用意しております。9:00～17:00まで。



文化ゾーン連携講座

芦屋市内の各館の学芸員が、それぞれの専門分野から、「芦屋」に関する事を中心に紹介する講座を開催します。

※詳細は随時当館HPでご案内します。



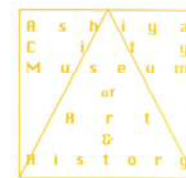
〒659-0052 兵庫県芦屋市伊勢町12-25
TEL: 0797-38-5432 FAX: 0797-38-5434
ashiya-museum.jp

Ashiya City Museum of Art & History

芦屋市立美術博物館
Exhibitions Schedule

2021.4

2022.3



ご利用案内

開館時間 | 10:00～17:00(入館は16:30まで)

休館日 | 月曜日(祝日の場合は開館、翌平日休館)

年末年始、展示替え期間中

観覧料

一般 300(240)円 / 大高生 200(160)円 / 小中学生 無料

展覧会によって料金が異なる場合があります

※()内は20名以上の団体料金です。

※高齢者(65歳以上)および身体障がい者手帳・精神障がい者保健福祉手帳・療育手帳をお持ちのかたとその介護のかたは各当日料金の半額になります。
※ご来館の際は、当館HPもご覧ください。

駐車場使用料(20台)

30分100円(8:00～20:00) / 60分100円(20:00～8:00)

※当館利用者は1時間無料

施設使用料

区分	10:00～12:00	13:00～16:30	10:00～16:30
講義室	2,850円	4,370円	7,230円
体験学習室	4,170円	6,820円	11,000円

交通のご案内

徒歩 → 阪神電車芦屋駅から南東へ約15分

阪急バス → 「新浜町」行きまたは「芦屋市総合公園前」行き乗車(31、32、35、36、131系統)、「緑町(美術博物館前)」停留所下車

バス乗り場 → 阪神電車芦屋駅から：南側2番のりば

JR芦屋駅から：北側5番のりば、阪急芦屋川駅から：南側5番のりば

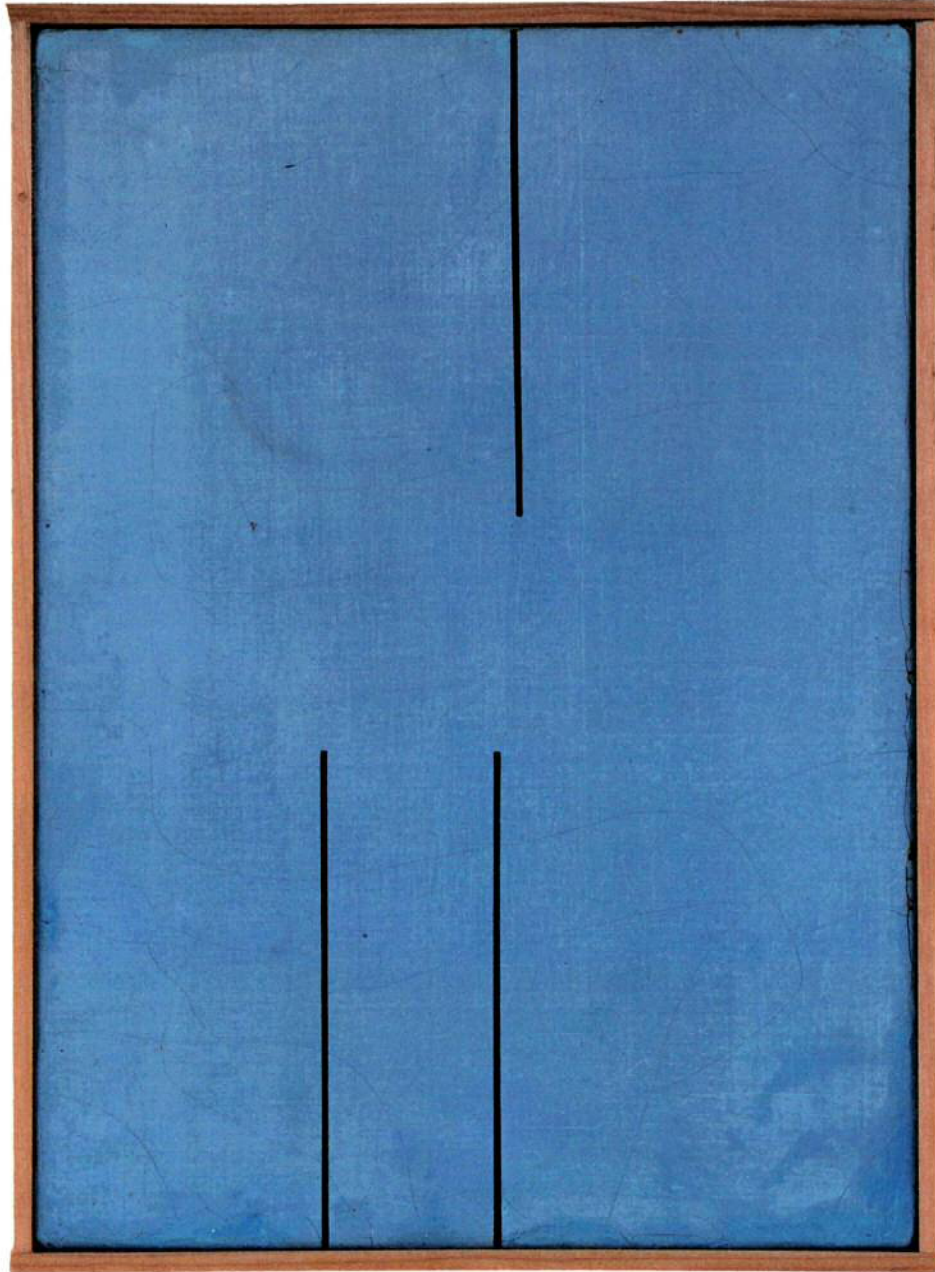




Ashiya
City
Museum
of
Art &
History

芦屋市立美術博物館

美博だより



金山明 (WORK)
1954年、油彩・布
33.5×24.0cm

金山(1924-2006)は、直線、円、四角などの、極めてシンプルで幾何学的な抽象絵画を手掛けてきました。本作品は、吉原治良を中心に芦屋で結成された「具体美術協会」の機関紙、「具体」第2号(1955年)で紹介されたものです。「芦屋の時間 大コレクション展」(2020年)に続いて、2021年度のコレクション展でも金山作品の魅力をご紹介します。

1

展覧会報告 2-4

- 藍のファッション展
- 芦屋の時間 大コレクション展
- 美術と音楽の9日間 rooms
- 迷路絵本 香川元太郎の世界展
- 歴史展 芦屋の歴史と文化財展
昔の暮らし展

研究ノート 5

『大橋了介滞欧日記』
1927年9月-1932年9月

学芸員コラム 6-7

- 「時間=量」の驚異の部屋——
「芦屋の時間 大コレクション展」を振り返って
- 「草相撲」が芦屋で行われていた!

展覧会紹介 4 植松奎二 みえないものへ、触れる方法 — 直観
Ways of Touching the Invisible - Intuition

藍のファッション展

2020.4/7～9/6 (4/7～5/31臨時休館)

ゆかたを中心に、日本の藍の衣装と藍染めの魅力を紐解いた展覧会。第1章では、絞り染めや、失われつつある長板中形、籠染めなどの技法を取り上げ、江戸時代のゆかたから、人間国宝の清水幸太郎(1897-1968)などによる作品を紹介した。2章では、2010年代のゆかたを、現代のドレスコードに合わせたコーディネートで展示するほか、有松絞りや藍染めなどを用いながらも、伝統的な「着物」の形にとらわれずに、新しい感性で作品を発表している作家やファッションブランドを紹介した。最後の第3章は「本藍」をテーマに、藍の葉を原料とする「すくも」を用いながら、伝統的な工法を経た生み出された染織作品やファッション、デザインプロダクトを、ドキュメンタリー映像とともに展示、幅広い作家やブランドが手がけた約60点の作品により、藍のファッションの伝統と現在(いま)を展覧した。

「新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言」発令(2020年の4月7日～5月25日)により、会期を9月6日までに延長。関連イベント、公演会「長板中形の伝統と現在」(講師:松原伸生、4月25日)、ワークショップ「有松絞り染めを体験しよう」(講師:村瀬裕(スズサン代表)、4月19日)、およびギャラリー・トークなどは、すべて中止した。

(伊志慧)



ともに展示会場風景

美術と音楽の9日間 rooms

2020.11/14～11/23

本展は、企画協力にnight cruisingの島田達也氏、映像作家の林勇気氏を招き、2016年3月に開催した「美術と音楽の1日 rooms」*の最終章である。美術館で過ごす時間に注目してもらうためには、どのようなことができるのかと考えたことが企画の発端だ。美術博物館ならではの建築物の構造、空間によって変化していく音、時間によって変わり続ける映像作品やパフォーマンス、ライブを行い、参加者が自らの意思で関わり続ける状況・環境を生み出すことを試みた。前展は、常に何か動いている状況であったため、本展では、無音を聞く、静寂を見るという環境を設けるため会期日数を増やした。藤本由紀夫は、彼の作品と来場者が発する声や動作音が要素となり奏でられる「室内楽」を生み出した。原摩利彦は当館所蔵の小出権重の作品をイメージした即興演奏の音源と芦屋の海岸で収録した音が会場で響き合う中、小出作品を鑑賞するという空間を作り、ASUNAと林勇気は「room」という言語を持つ多様な意義を要素とした音と映像の作品3点を発表した。太田美帆、宮内優里、平井真美子・坂本美雨のライブやイベントでは、会場となったホールに美しい音色が響き、芦屋の夜空をも彩るような時間となった。米子匡司、中田粥、清造理英子は、芦屋の街中の音へ耳を傾けるツアー・ライブを行った。彼らの作品は、時間という要素、伴い変化していく環境へと意識を向かわせ、視覚・聴覚という感覚の領域にとらわれず、能動的に体験することの意義を考えさせてくれたと感じている。本展は、2020年3月に開催する予定であったが、コロナ禍の影響で中止・延期となった。未来が見えにくい状況が続く中、出品者・演奏者の理解と協力が、開催を待ってくださっている方々の思いが支えとなって、展覧会の開催が実現した。(大槻晃実)

* 美術と音楽の一日「rooms」 2016年3月5日
haruka nakamura、西森千明、林勇気+米子匡司、原摩利彦、藤本由紀夫、Polar M
村上三郎(紙破りの記録映像)、小杉武久(作品/当館所蔵)



ASUNA+林勇気



原摩利彦



平井真美子

撮影:飯川雄大

芦屋の時間 大コレクション展

2020.9/19～11/8

本展の準備を進めるにあたり、一度見た作品だから、何度も見ているからと、鑑賞する機会が少なくなりがちな所蔵作品の前で、いかに立ち止まってもらえるかを目指すことからスタートした。コレクション展を開催することが決まった2019年初冬、小説家の福永信氏に企画協力の依頼をした。福永氏には過去に当館での企画に参加いただいており、その際に新鮮な目線で物事を捉え続ける柔軟な姿に感銘を受けていたことが理由だ。福永氏からの当初の提案は「全作家の作品を展示する」「美術館の年表をつくる」「毎日展覧会に関するツイートを」「各作家のキャプション解説の「揭示替え」(前期・後期)を行う」というものだった。これらは、硬い考え方・捉え方(固定概念)に風穴を開けてくれることになった。福永氏が作品を選び、筆者と副担当の伊が展示構成を考え、美術部門収蔵作品の全作家126名の作品約1500点の中から、190点の作品が並んだ。解説文はこの3名と、歴史部門の室井学芸員とデザイナーの鈴木大義氏が担当した。流派やグループ、表現の傾向などから作品を選ぶことは多いが、今回は作品自体の魅力から選ばれたものばかりで、隣り合い向かい合う作品同士、フレッシュな顔ぶれが多かったように思う。その環境は、作品の背景(情報)から鑑賞へ向かうのではなく、作品そのものをじっと見る・じっくりと対話するという状況を生み出し、作品のさまざまな表情を発見することができた時間となった。

福永信という新しい漕ぎ手によって進んだ本展という船は、「コレクション展の可能性」という大きな夢を運んでくれた。

(大槻晃実)



展示会場風景



福永氏編の年表は1920年から2020年までの100年間に起きた芦屋や所蔵作家に関する出来事が綴られた。当館は1991年に開館、2021年3月に30年を迎える。

撮影:守屋友樹

* (1) 一日だけの展覧会「芦屋の近代 現代のとりくみ-当館コレクションより」
2018年3月25日 企画協力の伊藤存、伊達伸明、中村裕太、福永信が、時間中ずっとギャラリートークをした異色の展覧会
(2) まなびはく「福嶋亮大と福永信の〈普通の会話〉～谷崎と小出を出発点に～」
2018年6月9日 小出権重、谷崎潤一郎の書簡等を特別展示しながらのトーク

迷路絵本 香川元太郎の世界展

2020.12/5～2021.2/7

2005年に発表された『時の迷路』以来、シリーズ累計300万部を発行した「迷路絵本シリーズ」や、お城をはじめとした数々の「歴史考証イラスト」を手掛ける香川元太郎の原画展を開催。迷路絵本シリーズは、作者が歴史関係のイラストを長年手掛けていたことから「歴史をテーマにした迷路を手掛けては」という提案を受けて、第1作『時の迷路』を発表。一つ一つ丁寧に考証を行ったイラスト、迷路の周囲にテーマに関連したかくし絵が描かれている作品で、児童から大人まで夢中になって楽しめる作品として人気を博す。本展では、全作の中から11シリーズの原画を紹介するとともに、迷路絵本の世界を体験できる立体迷路を1階に設置した。歴史考証イラストは、作者の仕事の原点といえるお城を中心とした歴史の舞台を描いた作品であり、数々の書籍やテレビ番組などでも紹介されており、歴史ファンからも根強い人気がある。本展では、関西地方のお城や史跡を中心に49作品を展示した。12月には作者及び共同作者の香川志織の2名で、迷路絵本の制作や技法についての講演会やギャラリートークを開催。制作過程を紹介するなど、作者の素顔に触れる事ができたイベントとして好評を得る。1月には、歴史考証イラストを中心とした講演会も開催。最新作の作品の他、30年以上手掛けてきたお城のイラスト制作過程を紹介。新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言の発令があった中、感染対策を講じた上で運営を行い、展覧会は無事に終了した。(室井康平)

延期・中止になった展覧会
● スポーツものがたり-芦屋とスポーツ...開催延期 [2021年度開催予定]
● 第38回 芦屋市造形教育展...開催中止 [2021年2月13日～21日]



グランドキャニオン 2006年「自然遺産の迷路」より



香川元太郎・志織による講演会の様子(2020年12月5日)



香川元太郎によるギャラリートークの様子(2020年12月5日)

■ 芦屋の歴史と文化財展 4/7~11/23 (4/7~5/31 臨時休館)

新型コロナウイルスの感染拡大による臨時休館の為、6月2日(火)より展示が開始となった。毎年恒例の芦屋の歴史資料を古代から近代にかけて紹介する内容で開催。6月下旬に芦屋市を含む近隣5市で申請した「伊丹諸白と灘の生一本 下り酒が生んだ銘醸地、伊丹と灘五郷」が日本遺産に認定されたことにより、当市の日本遺産関連文化財を特別展示する事になり、芦屋川の水車位置を記した「芦屋川水車絵図」や伊丹の酒造りの挿絵が掲載された「撰津名所図会」といった江戸時代のこの地域の生活の様子を写した資料を展示した。また、阪急神戸本線の開業100周年に関連した展示も開催し、当時のパンフレットなどを展示した。
(室井康平)



日本遺産展示 ※画像は芦屋川水車絵図



阪急神戸本線開業100周年展示

■ 昔の暮らし展 12/5~2021/2/21

本年の展示は、例年の「昔の生活」をテーマにした展示のほか、文化財展から引き続き「日本遺産関連展示」と新しく芦屋市に寄贈された「打出焼」のコレクションの展示を行った。「打出焼」展示は、芦屋をはじめとした郷土史研究家の藤川祐作氏が長年コレクションした打出焼が数多く寄贈され、その内の数十点を当館にて展示。色鮮やかかつ、バラエティ豊かな打出焼の陶器とともに、打出焼の歴史を紹介する展示をおこなった。藤川氏のギャラリートークも予定していたが、昨今の感染状況の拡大により中止となった事が悔やまれる。
昔の生活展示では、新たに寄贈された1917年にスコットランドで製造されたシンガー社のミシンなどを展示。かつて仕立屋を営んでいた方のご遺族から寄贈されたもので、当時の職人道具の様子を展示した。
(室井康平)



打出焼 (黒輪菊文仙人像付盃)

■ 植松奎二 みえないものへ、触れる方法 - 直観 2021/3/13~5/9 Ways of Touching the Invisible - Intuition

植松奎二(1947-)は、1969年より現在にいたるまで、彫刻、インスタレーション、写真、映像、パフォーマンスなど、多岐にわたる活動により、一貫して重力、引力といった見えない力の法則から世界の構造・存在・関係をよりあらわにしてきました。自身の身体を用いた空間の存在把握や、人と物体との関係性など、世界を知覚させる作品を数多く発表しています。植松は1年以上をかけて当館の空間と構造を読み解きました。本展では新作のインスタレーションや立体作品、70年代の写真作品を中心に約70点が並びます。
展示構成は4つのパートにわかれます。「宇宙に触れる」「思考に触れる」「未知なるみえない重力の庭に触れる」「エネルギーに触れる」
植松の作品を通して、この世界を新たに認識する方法を探っていきます。(大槻晃実)



〈オマージュ フーコーの振り子〉2019
芦屋市立美術館博物館での展示風景



植松奎二スタジオにて 2020年10月16日

『大橋了介滞欧日記』1927年9月-1932年9月



1928年2月11日



1927年9月17日頃



1928年 ヴィリエ・シュール・モランにて
左から佐伯、荻須、山口、横手。撮影は大橋と考えられる。

本稿では、2018年に新しく収蔵された大橋了介関係資料の中から、『大橋了介滞欧日記』を紹介します。
1895年、彦根市で生まれた大橋了介は、父親の仕事の関係で幼少期を台湾で過ごす中、祖父の影響で画家を志すようになります。25歳の時に東京美術学校を受験、不合格となるも画家の夢を諦められず、岡田三郎助の画塾で学びました。理解者・支援者に恵まれ、1926年に渡欧後援会が発足、翌年渡欧します。

180ページにも及ぶ本日記には、1927年9月17日頃に横浜からフランスへ向かうアトスII号に同船した荻須高德、山口長男、横手貞美たちとの日々が綴られています。船員を写生したり、寄港先の香港で食事を楽しんだほか、サイゴンやシンガポール沖でスケッチしたことなど、彼らの交流が詳しく記されています。フランス到着後は、荻須と山口の紹介で佐伯祐三と知り合い、彼らと美術館や画廊、蚤の市などを訪れるなど、楽しい日々を過ごしました。佐伯と二人で語りあった日の日記には、「アカデミーで学ぶ事の無意味さを教わった、自分の秘伝を惜しげもなく人に教える佐伯の人柄に敬服した」と胸の内を綴っています。

日記には、1928年2月に佐伯一家と荻須、山口、横手たちとヴィリエ・シュール・モランを訪れた日の記録が残っていました。「昭和三年の二月十一日 佐伯、横手、荻須、山口君に一日おくれて巴里の北東の寒村ビレ シュール モランにやって来た。」と記されていることから、佐伯たちは2月10日に訪れていたことがわかりました。文献では、彼らがモランへ到着した

日は2月中旬から下旬とされていますので、重要な発見となる記録でした。
到着の日から始まるそのページには、ごはんが美味しかったこと、ひたすら描く日々であることなど、滞在中の出来事や大橋の思いが綴られ、彼らの動向を窺うことができます。なお、大橋了介関係資料には、当時モランに滞在していた了介宛ての藤田嗣治の葉書(1928/3/27消印)が残っています。「私はあなたが(パリに)戻ってきて(モランで制作した)絵を見るのを楽しみにしています。ホテルで一緒にの皆様にもよろしくお伝えください」と書かれていることから、少なくとも大橋たちは3月27日頃まで滞在していたと推測できます。その後、大橋、荻須、山口、横手たちはパリへ戻る一方、佐伯はモランに滞在し制作を続けました。6月、4人はパリで病に倒れた佐伯の看病を続けますが、1928年8月16日、佐伯は30才の若さで亡くなります。

モラン滞在の記録は到着した2月11日のみで、次のページには佐伯が亡くなった後と考えられる記録が残ります。モラン滞在中やパリに戻ってからは日記を書く時間がなかったのか、あるいは日々の出来事を記す気力がなかったのでしょうか。後のページには、後に妻となるエレナとの日々が綴られています。

美術館では、作品とともに関係資料も収蔵しており、作品・作家への理解を深めていただけるよう、調査・研究を続けています。

(大槻晃実)

大橋 了介 おおはし りょうかい (1895-1943)

1927年から1933年までフランスに滞在。1928年よりサロン・ドートヌ、サロン・アンデパンダンなどに毎年出品。一方、パリから出品した《居酒屋》が第12回帝展で入選。1933年エレナ・ペレイラ・ダ・シルバと結婚、帰国する。1935年、エレナの仕事の関係で、東京から現在の芦屋市清水町へ。転居後は目立った活動もなく静かに暮らした。

「時間＝量」の驚異の部屋—— 「芦屋の時間 大コレクション展」を振り返って

2020年秋の「芦屋の時間 大コレクション展」は、そのタイトルの中に、当館開館以来の30年間という「時間」と、126名もの全収蔵作家、および彼らの作品約190点という「大(量)」が共存する破格の展覧会でした。30年という時間を量に置き換える、または、可視化する試みだったと言えるでしょう。「時間」を選んだのは本展担当の大槻学芸員で、「大」を選んだのは企画協力者である小説家の福永信さんでした。本展が、両氏の合意による、「時間」と「大(量)」の併置の上に成り立っていることをまず、踏まえておきたいと思います。そしてなにかそんなに破格だったのか、横から両氏を見守った(?) 副担当の視点で振り返ります。

美術館が絵画や写真など、平面作品の展示プランを準備する際は、作品数に対する展示可能な壁の面積を計算します。展覧会のテーマと章立てで空間を区切った上で、額縁と解説パネル類の横幅を考慮し、個々の作品の鑑賞が邪魔されないように作品同士の間適切な距離(ソーシャル・ディスタンス)を計算します。しかし、福永さんとの打ち合わせを重ねる間に、壁がとんでもなく足りない、適切な距離どころか、キャプションを貼る場所も確保できないことが予想されました。特に、戦前の洋画や具体美術協会の絵画などを集めた第1展示室は、最近の美術館主催の展覧会ではあまり見られなくなった2~3段掛けにしなければならず、3段掛けを超えて天井までも作品で埋め尽くされる、「驚異の部屋(Wunderkammer)」が現代によみがえるのではないかと、展示プランを考えながら、恐れる日々でした。私の予想は、展示と照明作業を一通り終えた後、改めてこの部屋に足を踏み入れたとき、現実となりました【p.2展示風景写真参照】。作品の量とその光景による圧倒的なスペクタクルを一瞬で感じたのです。仕切り壁がほとんどない広い部屋に入った瞬間に降りかかる「壮大さ」は、展示室全体を一つの「驚異の部屋」として体験させるパワーを持っていました。

一つの展示空間の中に映像や写真、絵画やオブジェなどの様々な要素を配置し、部屋全体を一つの作品として構成する、いわゆる「インスタレーション」というジャンルは、1960年代以降、特に1990年代に至りブームを迎え、今も一般的に使われている手法です。空間そのものにタイトルが付き、部屋全体を作品とみなすわけです。カンヴァスに描かれる油彩画や、石やブロンズなどを材料にする彫刻とは異なり、インスタレーションは空間全体を支持体とします①。鑑賞の対象として目の前に提示される平面や立体作品を見る観客の「凝視」は、この部屋の中では乱れ、空間の「体験」に変わるでしょう。この第1展示室は、まさに絵画(と数点の彫刻による)のインスタレーション作品のように見えました。他の展覧会と違って、章立てや目玉作品、見どころなどの存在しない、あるいは、すべてが見どころのこの部屋で私たちは、作品に近づいたり、離れたたり、展示室入口や隅っこで壁全体を俯瞰したり、スマホの横長の画面に収まるショットを

撮るために10歩くらい引いたり、作品が3段目に掛かっているため爪先立ったりと、展示室内をくるくる回ります②。まさに部屋全体を「体験」するのです。いつもとは少し異なるこの歩き方は、福永さんの言葉を借りると、「『展覧会というのはこんなもの』という思い込みが粉碎され、観客一人が、複数に分散するような事態が起こる」ことではないかと思えます。その一方で、この部屋はインスタレーション作品が持ち得る危うさ、つまり、見せ物小屋や驚異の部屋のようにスペクタクル化する危険性もそのまま孕んでいるように見えました。もちろん展覧会のテーマに沿って作品を「観察／鑑賞」する行為が、部屋全体を「体験」する行為に変わること自体は、決してネガティブなことではありません。しかし、「すごい!」と嘆声をあげながら第1展示室の壁を「引きで見て」、その「強度を体験」③している間、視野の中にはいつも複数の作品が入り込み、個別の作品に集中することはなかなか難しい。壁を眺めながら展示室内を一周して、展覧会の鑑賞はそのまま終わりとなる恐れもあります。

しかしながら本展は、この危うさを乗り越えるために、私たちをつかんで離しませんでした。あらかじめ、様々な工夫が展覧会の中に埋め込まれていたからです。展示作業終了後、内覧会とカタログの発行とともに展覧会は「凍結」④されるとも言われますが、お客さんに作品を「七度見」してもらおうための本展の努力は初日からさらに続きました。一通り展示を見て疲れがくる頃に2階休憩スペースのソファに座ると、本展の作家全員が少なくとも一回は登場する、100年分の「関連年表」が目に入ります。(2度見)。作品解説キャプション代わりに、35ページに達する「作家解説」をバラバラめくると、また違う作家像が浮かび上がります(3度見)。しかもこの冊子は、会期前期分と後期分で執筆者が異なり、アピール・ポイントも異なります(4度見)。また、大人も子供も楽しめるワークシートを片手に、会場をもう一周(5度見)、そろそろ第2展示室に移動すると、第1展示室で見た作家の他の作品がまた出てきます(6度見)。コロナ禍のため、イベントの開催も難しい中、福永さんと学芸員たちは1日に2回、当館公式Twitterで展示風景画像とともに個々の作品の魅力を発信したりもしました(7度見)。本当に、あの手この手で、私たちをずっとつかんで離さなかったのです。

190点という多すぎる数の作品が「3密」していた本展は、美術館におけるコレクション展というものの再定義を促しながらも、それ自体でスペクタクル化する可能性も含んでいる、ややこしい展覧会でした。大槻さんは学芸員の人生をかけた展覧会だったと回想するほどの、驚異の部屋でしたが、今後のコレクション展に大きな宿題を残したと言えるでしょう。コレクションを展示するという作品「選定」の行為が、収蔵作家全員を集めた本展によってその極限まで試された後に、再びコレクション展を企画することは、なかなか難しいことだと思うからです。

(尹志慧)

「草相撲」が芦屋で行われていた!

日本の国技「相撲」。最近では、芦屋市出身で幕内最高優勝2回を誇る大関・貴景勝関の活躍はよく知られています。今回紹介する所蔵資料は、各地の農村や地域で行われていた「草相撲」に関連するものです。「草野球」という言葉はよく知られていますが、「草」とは「粗末、簡単な」という意味を持ち、現在の本場所の様な興行では無く、簡単な様式で行われていた相撲の事を指しました。

さて、少しだけ相撲の歴史を紹介します。相撲の起源は諸説ありますが、『日本書紀』に野見宿禰と當麻蹶速が対戦したという記述があります。蹶速が垂仁天皇に「強い者と力比べをしたい」と進言し、天皇は出雲国にいた宿禰を呼び寄せて対戦させました。結果は、宿禰が勝利し蹶速はここで命を落としてしまいます。相撲というよりは決闘とも言えるような出来事でしたが、対戦した両人は相撲の始祖として現在も知られています。尚、宿禰は播磨国立野(現在のたつの市)で亡くなったとされており、当地に野見宿禰神社があります。実は兵庫県と相撲は深い関わりがあるのです。その後、朝廷では度々相撲の記録があり、年中行事として相撲節が行われていました。中世では、織田信長が相撲好きだったという記録が残っています。相撲は全国各地に広まっていき、年中行事の神事から大衆の娯楽として身近なものとなっていきました。

ところで、「大相撲」が今のように年間6場所開催されるようになったのは、1958年(昭和33)年なので、実は比較的最近

の出来事です。それまでは、開催場所も開催数も異なっていました。さらには大正時代以前では、東京と大阪、京都などそれぞれで興行を行っていました。大阪相撲は、やがて東京相撲と合併しますが、現在でもいくつかの親方名や相撲用語にその名残を見ることができます①②。

さて、ようやく本題の資料ですが、当館には「草相撲」の取り組み表が2枚所蔵されています。一つは芦屋村でのもの、もう一つは田中村(神戸市東灘区)のもので、田中村の取り組み表は分かりやすく、東西に出場した力士の四股名が記載されています。芦屋村の方の特徴は、行司の名前や力士の出身地(「アシヤ」や「ウチテ(打出)」など出身地が記されています。「ノセ」「カハチ(河内)」の他、「カラツ(唐津)」など遠方から来ていたと思われる力士もいたようです。この草相撲については、「勸進」との名がみえる様に、寄付を募る目的で開催されていたことが伺えます(勸進相撲)。村で開催される相撲は、主に、寺社の建設などの資金集めの為と考えられることが多いですが、村の開発の資金に充てられる興行もあったようです。参加する力士の中には、相撲で生計を立てる為に各地の興行に出稼ぎする強者もいたようです。

明治以降は様々なスポーツ競技の普及もあり、草相撲は減っていきませんが、誰が見ても楽しめる相撲は、神事的な国技としての側面の他、日本国民に根付いている文化として今でも多くの人から愛されています。

(室井康平)

- ① 現在の相撲に「時津風」「三保ヶ関」などの親方名跡や、後援者を指す「タニマチ」などの相撲用語に大阪相撲の名残がみられます。
- ② 大阪相撲とは、1702(元禄15)年に大阪の堀江で興行を許可されて以来、堀江や難波新地で定期的に開催されました。はじまりのきっかけは、堀江の開発資金の為に興行だったそうです。明治時代には大阪相撲協会が組織され、1919(大正8)年には大阪国技館も建設されました。しかし、東京と規模の差が大きくなり、1925(大正14)年に東京と大阪が合併し大日本相撲協会が発足しました。合併後、戦前戦後間もない頃は大阪場所の開催が無い時もあったものの、1953(昭和28年)以降は、3月場所として大阪開催が定着します。(2021年は、新型コロナウイルス感染対策により大阪開催を断念。)



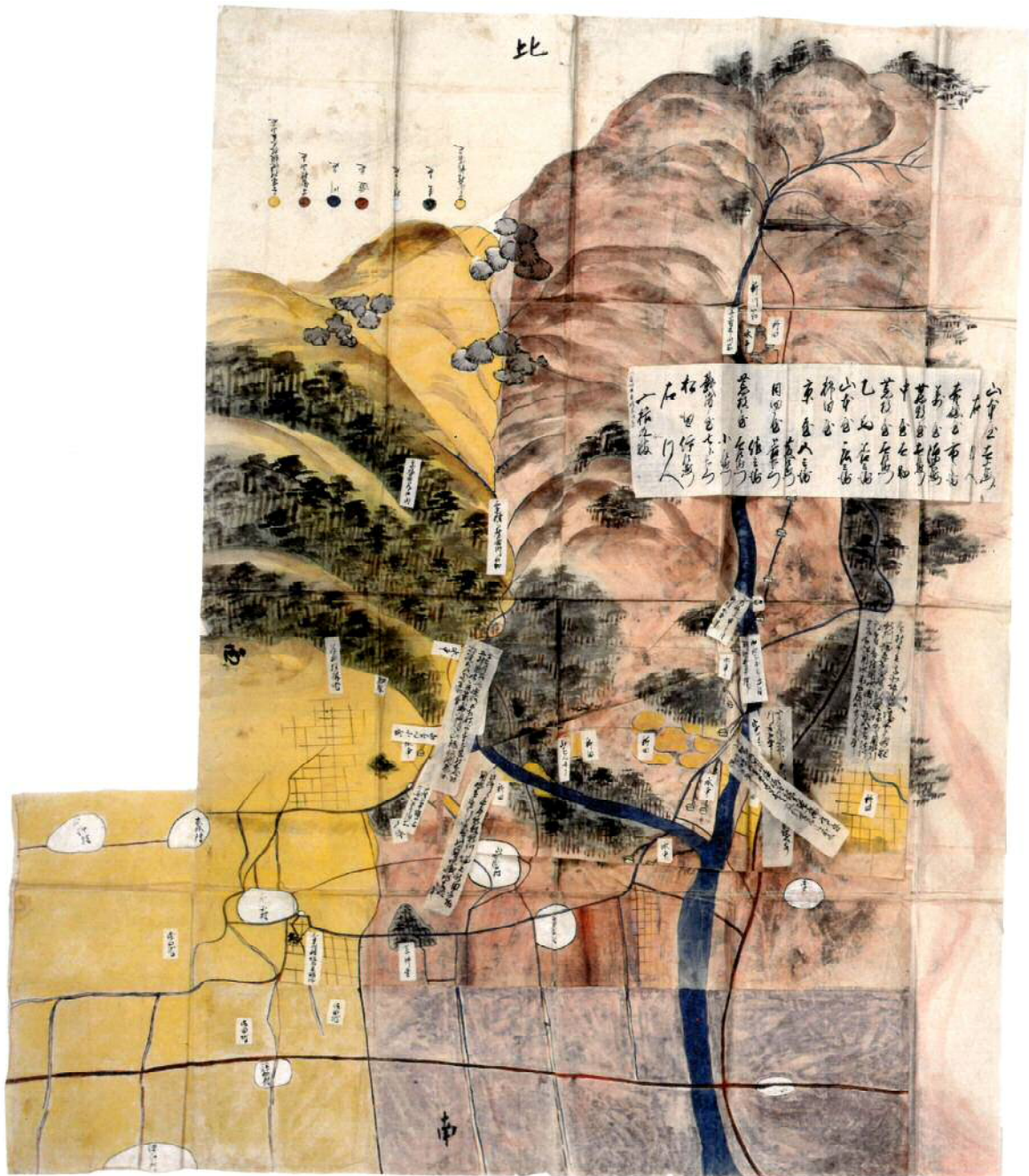
左上:田中村の取組(組合)表
左下:芦屋村の取組(組合)表

右:難波新地の相撲興行(〈摂津名所図会 大坂部四下〉より)
左側に土俵と力士の姿が確認できる

① ボリス・グロイス「観客のインスタレーション」『イリヤ&エミリア・カバコ 私たちの場所はどこ?』清水裕訳、森美術館、2004年、12頁。
② インスタレーション・アートにおけるこの「くるくる」(鑑賞者の脱中心化(decentering))に関しては次を参照した。Claire Bishop, *Installation art* (London: Tate, 2005), 128-133.
③ Hans Ulrich Obrist, "Installations Are the Answer, What Is the Question?" *Oxford Art Journal* 24, no. 2 (2001): 95.
④ Obrist, op. cit., 100.

芦屋川水車絵図
江戸時代末期

芦屋川沿いに設置された21台の水車が描かれています。水車は、油の生産や精米などに使用されました。2020年度に日本遺産となった『「伊丹諸白」と「灘の生一本」下り酒が生んだ銘醸地、伊丹と灘五郷』の構成文化財となりました。



2021年度の展覧会予定

2021.3/13～5/9

植松奎二 みえないものへ、触れる方法 — 直観

2021.9/18～11/21

コレクション展(仮称)

2022.2/12～2/20

第39回 芦屋市造形教育展

2021.5/29～8/29

スポーツ展 ～芦屋・阪神間のスポーツの歴史と未来～

2021.12/4～2022.2/6

村上三郎展(仮称)

202.3/8～3/27

第66回芦屋市展

芦屋市立美術博物館

〒659-0052 兵庫県芦屋市伊勢町12-25

Tel:0797-38-5432 Fax:0797-38-5434 ashiya-museum.jp

美博だより 2021年3月9日発行(初版第1刷)

発行者 芦屋市立美術博物館



2021年度 展示年間スケジュール

春の
特別展

美の文豪、潤一郎～谷崎の美か、巨匠たちの美か～

会期 2021年3月13日(土)～6月6日(日)

「耽美派」といわれた文豪、谷崎潤一郎。その美意識・審美眼は、やはりこだわり深くユニークなものだった。谷崎じしんのお気に入りだった、またその作品世界に関わる絵画・美術品からは、そんな文豪の美への視線がおのずと浮き上がってくるだろう。特別展では、谷崎ゆかりの数多くの名画・名品を贅沢に展示、様々な角度から文豪の美の世界に迫る。

北野恒富「雪の朝」



夏の
特設展

大正の〈文豪〉ブーム～『文章倶楽部』のメディア戦略～(仮題)

会期 2021年6月12日(土)～9月5日(日)



『文章倶楽部』(左・大正6年5月、右・大正6年7月)

昨今、近代作家をイケメン化した漫画やゲームの影響から〈文豪〉ブームが生まれている現象に注目し、ブームの源流をたどる。明治期には物故していた尾崎紅葉や樋口一葉などが雑誌で文豪と位置付けられ、大正期には、文芸雑誌『文章倶楽部』が戦略的に作家の写真を多用し、アイドル的な存在となっていた。谷崎や芥川らがどのようにイメージ化されていたか、当時の雑誌から浮かび上がらせる。

★文豪谷崎潤一郎の人生とその作品世界を、初版本や肉筆書簡・遺愛の品々等、多様な資料によって年代順にわかりやすく展示する通常展「谷崎潤一郎・人と作品」に併設。

秋の
特別展

「細雪」、平穩の昇華～細やかな、日々の暮らしの、物語～(仮題)

会期 2021年9月11日(土)～12月5日(日)

文豪谷崎潤一郎の代表作「細雪」。そこで描かれるのは、教養と財産と伝統、そしてとりわけ女たちの艶やかな存在感に裏打ちされた、平穩で豊かで美しい市民的日常である。それは、谷崎がもっとも大切にしていた価値観であり美意識であったに違いない。この上もなく細やかに描き込まれていく、どうということもない日々の暮らしの、何と美しく愛おしいことか。文豪が、その至高の筆致で書き留めた、失われゆく世界をじっくりと味わう。

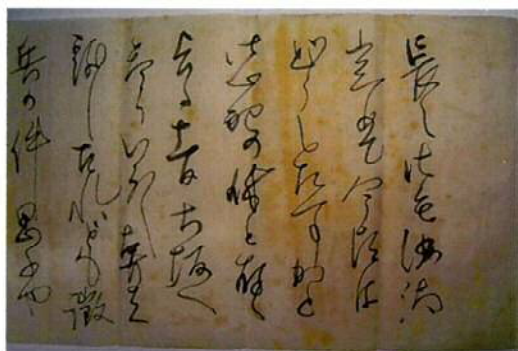


『細雪』初版本

冬の特設展

谷崎からの手紙～書簡の中の文豪の素顔～（仮題）

会期 2021年12月11日（土）～2022年3月27日（日）



大正元年8月5日付旅館八千代宛書簡
（谷崎26歳の貴重な筆跡）

「手紙」は、その文面はもとより、筆跡や文体、ハガキか封書かといった書簡としての形式、便箋か巻紙かという用紙の使い分け、ペンか筆かの筆記用具の別にいたる、やり取りされた人と人との間柄を目に見えるかたちで物語る、情報の宝庫である。そんな手紙からみえてくる、文豪谷崎の折々の心象風景や周囲の人々との関係性を浮き彫りにしていく。

★文豪谷崎潤一郎の人生とその作品世界を、初版本や肉筆書簡・遺愛の品々等、多様な資料によって年代順にわかりやすく展示する通常展「谷崎潤一郎・人と作品」に併設。

2021年度展示予定 *展示名は、変更する可能性があります。

	3月	4月	5月	6月	6月	7月	8月	9月
展示	春の特別展 美の文豪、潤一郎 ～谷崎の美か、巨匠たちの美か～				展示 入替	夏の特設展 大正の〈文豪〉ブーム ～『文章倶楽部』のメディア戦略～（仮題） 通常展「谷崎潤一郎・人と作品」に併設		
期間	3月13日（土）～6月6日（日）					6月12（土）～9月5日（日）		
	9月	10月	11月	12月	12月	2022年1月	2月	3月
展示	秋の特別展 「細雪」、平穩の昇華 ～細やかな、日々の暮らしの、物語～（仮題）				展示 入替	冬の特設展 谷崎からの手紙 ～書簡の中の文豪の素顔～（仮題） 通常展「谷崎潤一郎・人と作品」に併設		
期間	9月11日（土）～12月5日（日）					12月11日（土）～3月27日（日）		

- 開館時間 午前10時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
- 休館日 月曜日（祝日開館、その場合は翌日休館）・年末年始（12/28～1/4）
展示入れ替え期間
- 入館料 一般300円 大高生200円 中学生以下は無料
- ◎団体料金（20人以上）は2割引き。
- ◎高齢者（65歳以上）および身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳、療育手帳をお持ちの方、ならびにその介護の方1人は半額。
- ◎特別展は展覧会によって料金が異なります。
- ◎春の特別展は 一般500円 大高生300円 中学生以下は無料となります。

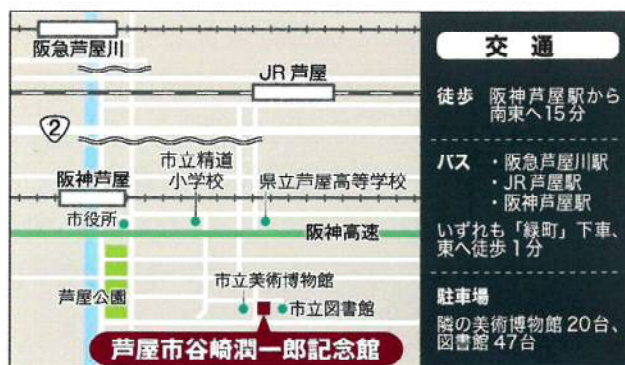
芦屋市谷崎潤一郎記念館

Tanizaki Junichiro Memorial Museum of Literature, Ashiya

〒659-0052 芦屋市伊勢町12番15号

TEL.0797-23-5852 FAX.0797-38-3244

<https://www.tanizakikan.com/>



vol.2 2020

谷崎記念館だより

●京都潺湲亭と谷崎記念館の庭園

京都下鴨の潺湲亭（京都市左京区下鴨泉州町五番地）は、文豪谷崎潤一郎が関西で暮らした最後の家である。六百坪（約二千坪）もの敷地を誇るその豪邸は、下鴨神社の境内を縁どるように流れる泉川のほとりに佇む。隣には、川端康成が名作「古都」を執筆した「泉川亭」がたつ。泉川に臨み、鴨川の流れも近いこの邸に谷崎が移ったのは、敗戦後の昭和二十四（一九四九）年四月。「潺湲」とは、水の流れる様を表す言葉である。谷崎の作品『夢の浮橋』（昭和三十五年刊）に登場する京都下鴨の邸宅「五位庵」は、この潺湲亭をモデルとしている。文豪がこの京都の家を引き払い関西を離れたのは、昭和二十一年暮れのことであった。

潺湲亭は近代数寄屋造様式の建築で、明治の末に建てられた。下鴨神社の「^{たけの}糺の森」を借景に池泉を湛えた日本庭園が、ひときわ見事である。平安神宮の庭も手掛けた七代目小川治兵衛の系統とみられる庭師の手になる、その「回遊式」（眺めるだけではなく庭内を巡りながら楽しむ様式）の名園は、多くの変化に富んだ庭石が目をおどろかせ、池泉の静謐を彩る滝とせせらぎの水音は「潺湲亭」の屋号を裏切らない。池泉の周りには、母屋や茶室そして谷崎が書斎として使った離れなどが取り巻く。平安朝の「寝殿造」を思わせる、王朝趣味に溢れた谷崎好みの佇まいである。

芦屋市谷崎潤一郎記念館は、じつは、この京都潺湲亭をモチーフとした「数寄屋風」の建物なのである。もちろんその中庭も、潺湲亭の名園にならった風情豊かな日本庭園となっている。

谷崎は潺湲亭の庭をこよなく愛し、念入りな手入れを欠かさなかったというが、谷崎記念館の庭園も、行き届いた手入れ剪定の労にかけては本家に劣らない。その甲斐もあってか、春には谷崎お気に入りの紅枝垂れ桜、秋には紅葉が艶を競い、緑の夏・雪の冬もなかなか捨でがたい趣きをみせてくれている。そんな四季折々、ご来館の皆さんも、この庭で思い思いの歩みを楽しまれているようだ。

潺湲亭の庭の情趣を移した谷崎記念館の庭園は、文豪谷崎の美意識、その趣味嗜好を肌で感じ味わうことのできる、贅沢な空間なのである。

展示室

2020年度

● 秋の特別展「タブー」〜発禁の誘惑〜

文豪・谷崎潤一郎の生涯は八十年に及び、作家としてのキャリアも半世紀をこえる。その間、時々の世のタブーと危うい摩擦を引き起こし、時に発禁の憂き目に遭いながらも、歴史の荒波と社会の転変を見事に掻いぐり、物書きとして生き延びてきた。文壇デビューの頃の、若き「異端児」(谷崎の過激な筆致は、作家としての挑発的ともいえる試行錯誤だったが、猥雑と不道徳とをよしとしない当局の見過ごすところではなかった。やがて、そんな作家谷崎の軌道は、大正期のデモクラシーとモダニズムの社会風潮の高まりと共に鳴り、さらには煽動してもいい。「痴人の愛」の引き起こした社会的反響とその新聞連載中断の事情には、そうした大正期の文化的潮流とともに、やがて来る「戦争の時代」の予兆も刻み込まれていた。



● 冬の特設展「初版本 on パレード ～名作たちのデビュー～」

「初版本」―その言葉の響きには、独特の緊張感が漂う。それは、名作たちにとっての、ただ一度きりの「デビュー」であればこそそのものなのだろう。「本」として世に出るまでが自分の作品、とのこだわりを持っていた谷崎の場合、自作の晴れ舞台への思い入れはとりわけ強い。凝った素材を使った贅沢な装丁による、念入りなドレスアップとメイクアップが施された初版本の数々。著名な画家による装丁・挿画が効果的な、「共作」ともいべき趣の本もある。そんな、贅沢な美術・工芸作品でもある初版本たちは、やはりそれなりに値のはる品物なのだ。また、様々なモノと比べて、商品としての「本」の価値がどれくらいなのか、時代によって変わってくる。さらに、「古書」としての初版本はまた別物で、目を見張るような高値がつくこともままある。特設展では、そうした「売り買われる商品」としての書籍という視点をもからめながら、谷崎作品初版本の世界を覗いてみた。



● ロビー展 「文豪の顔」 (秋の特別展) 関連展示

谷崎潤一郎は、明治十九(一八八六)年、まだ江戸の風情の色濃い東京日本橋に生まれ、関東大震災を逃れて阪神間に移る。戦争を挟んで京都に転居、神奈川湯河原で最期を迎えたのは、昭和四十(一九六五)年、七十九歳の夏だった。その長きにわたる人生。幼年のあどけない表情に、徐々に陰翳が刻み込まれ、「文豪の顔」へと変わっていくさまを、多数の写真パネルに肖像画をも交えて展示した。



文壇デビュー頃の谷崎



昭和二年岡本好文園にて



昭和三十八年喜寿の祝い

● 夏の特設展「大谷崎と文豪たち」

谷崎は様々な文豪たちと交流し、創作の糧とした。明治末の文壇出発期から大正期の作風に影響を受け、さらに永井荷風に「刺青」などを激賞され、華々しく文壇デビューを飾った。同世代の白樺派の作家・志賀直哉、武者小路実篤とは同年まで交友関係を築き、特に志賀の文体を称えた。

大正期には、芥川龍之介の『羅生門』出版記念会に招かれたのを機に、芥川、宮田春彦、久米正雄らとの親交を深めた。昭和初年に至ると芥川とは「小説の筋」をめぐって論争するが、その最中に芥川は自死、谷崎は追悼文で早すぎる死を悼んだ。そして、佐藤とは妻・千代を巡って対立し、のちに千代と離婚、千代と佐藤が結婚すると、一大スキャンダルとして世間に衝撃を与えた。また、江戸川乱歩は、終生、谷崎作品を礼讃し続けた。



谷崎の奥の院と佐藤の甥竹田龍児の結婚式 結婚人相未焼花 (昭和十四年)

こうした文豪たちとの交流を示す自筆書簡をはじめ、追悼文、書籍などの資料と合わせて交友関係を紹介した。

● 春の特別展「潤一郎の美術展」

谷崎潤一郎は、美しいものをこよなく愛した。文豪ゆかりの絵画・美術品には、その美意識や関連する作品の味わいが滲み出ている。

傑作「細雪」の伝統とモダンの調和の美は、女たちのキモノ選びを描く小磯良平の佳作に見事に表されている。洋画家・和田三造の描く暗闇に浮かぶお琴と佐助は、日本画家による春琴抄より、谷崎が好んだものだった。谷崎一流の「陰翳の美」も、モダンの枠組みの中でそのものだったのだろうか。

北野恒富「雪の朝」は、谷崎好みの王朝趣味溢れる美人画の逸品。軸の表装には、松子夫人のキモノが使われている。文豪には、画中の美女と最愛の女性とがオーバーラップして見えていたのかもしれない。王朝趣味といえば、依屋宗達「源氏物語屏風切」は一つの極み。もと源氏五十四帖の各場面を描き込めた屏風から切りとられたという数奇な伝来を持つ大和絵の名品で、源氏物語口語訳に没頭していた谷崎が、執筆の慰みにしていたという。あわせて、日本画の錚々たる大家たちが谷崎源氏に寄せた挿絵の数々も、絵巻さながらの壮観さで見ごたえ十分。

棟方志功は、数多くの谷崎作品の装丁・挿絵に携わった。棟方独特の「板画」とともに貴重な肉筆画の数々も味わい深く、文豪との親交が触媒となった鬼才ならではの感性のきらめきが眩しく迫る。

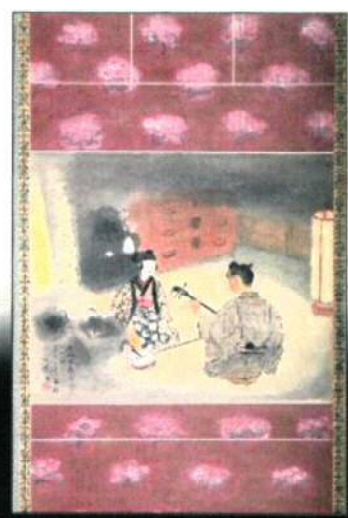
それは、谷崎の美か、巨匠たちの美か。いずれにせよ、その美の世界は、美しい夢へと私たちをいざなってくれたのだった。



依屋宗達「源氏物語屏風切」



北野恒富「雪の朝」



和田三造「春琴抄」

潤一郎あれこれ

内田巖画 谷崎潤一郎肖像 一戦中・戦後の谷崎と「細雪」一

谷崎は三度目の妻松子と祝言を挙げ、足かけ三年居住した芦屋打出の家（現・富田碎花旧居、芦屋市宮川町）を離れ、昭和十一（一九三六）年十一月、神戸住吉川の河畔にある家（現・倚松庵、神戸市東灘区住吉東町）に移り住んだ。ベルギー人が建てたという和洋折衷の庭付きの家に、谷崎と松子、その娘と妹二人、お手伝いの女性たちという大所帯での居住であった。

ここでの生活をもとに、「細雪」は描かれた。平安神宮での花見や山村舞の会、蛍狩りを楽しむ描写など、数々の出来事を作品に反映させたものであった。

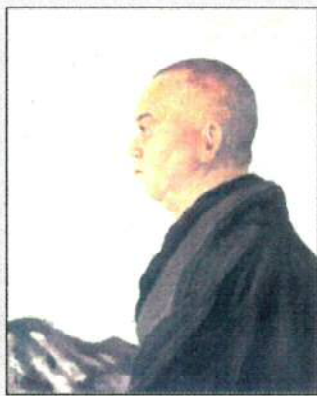
昭和十八年、『中央公論』にて二回発表されるが、緊迫していく時局に配慮し、掲載中止を余儀なくされた。翌年七月に上巻の私家版を上梓し知己朋友に配るも、当局を刺激し警察からとがめられたという。戦争が激化する中、谷崎はひたすら原稿に向かった。熱海の別荘に家族を呼び寄せ、さらに岡山県津山市、のち同県真庭郡勝山町へと再疎開してからも執筆を続けた。終戦を迎え、昭和二十一年六月に上巻が刊行されると、戦後の物資が不足する厳しい現状を生き抜く人々の心を潤し、大きな反響を呼んだ。

掲載中止の憂き目に遭いながらも創作熱を燃やし続けた谷崎。その姿に感銘を受け、同年三月四日、勝山町に近い刑部に疎開していた洋画家の内田巖^{おさかべ}がやって来た。内田^{いわお}（一九〇〇～一九五三）は、評論家・小説家内田魯庵^{ろあん}の長男で、東京美術学校にて藤島武二に師事。戦前は帝展、新制作派協会を拠点に活動し、戦後は日本美術会の初代書記長を務めた。勝山町での疎開生活を記した谷崎の「越冬記」を見ると、二月六日に

当地の知人から内田のスケッチ数十枚を見るよう届けられ、「婦人の横顔ばかりなれども皆面白し」との感想が記されている。三月六日に描き始め、半日もしくは一日かけてポーズを取る日を四日ほど費やし、一週間ほどで完成したという。勝山町の山並みをバックに、谷崎の厳しくも堂々たる横顔を描き留めた肖像画は、内田のリアリズムの頂点を示したとも言われている。戦争をものともせず、自己の芸術に真摯に向き合う文豪の息遣いが感じられよう。



谷崎一家が暮らした神戸の倚松庵



内田巖画「谷崎潤一郎肖像」
(谷崎記念館所蔵)

芦屋市谷崎潤一郎記念館 永井敦子

谷崎記念館だより 2020

2021年3月12日発行

発行者 芦屋市谷崎潤一郎記念館

〒659-0052 芦屋市伊勢町 12-15

Tel 0797-23-5852 Fax 0797-38-3244

HP : <https://www.tanizakikan.com/>

